

集団における母親の体験・認識・行為の変化—心理劇を介して—

○黒田淑子 野並美雪 榊田智子

(お茶の水女大)

目的 この研究は、親子関係を支える自主的な集団活動に、心理劇をどのように活用していけるかを探究し、参加者の母親の変化を軸に、その効果、留意点を明らかにすることである。1995年の日本心理劇学会の設立を節目に、心理劇の共通性・類似性を把握しつつ、多様な心理劇の実践研究が活発になってきているが、本研究は家政学・生活科学における「日常生活にひらかれた」心理劇の活用の連続研究に位置づけて行っているものである。

方法 1991～1996年度お茶大乳幼児集団研究会、児童集団研究会における親グループの活動資料・40セッションを取り上げ、心理劇を活用した集団活動の状況演出の過程にそって、実際の活動内容、集団の人間関係の変化と対応させながら、母親の体験、認識、行為の変化：一般的な傾向及び個々の独自な変化を明らかにする。

結果および考察 親グループにおいては、以下の4つの状況演出を組み合わせたセッションが繰り返し行われており、それぞれに異なる参加の仕方を通して、母親には次のような変化がみられる。1)心理劇のウォーミング・アップ：役割行為の可能性のひろがり、想像しつつ創造する体験、異なる自他の認識他、2)問題提起・集団討論：日常生活における問題の認識、問題を媒介とする自己の表明、人と話し合う基礎体験他、3)問題・課題の心理劇及び共有・集団討論：関係状況における問題の解明、問題解決のヒントの探索、心理劇・役割演技による重層的な人間関係体験、自己理解・他者理解の深まり他、4)集団のまとめ・個々のまとめ：話し合いを基盤とする課題の展開、あるいは予測性の心理劇による新たな関係の構築、日常生活のかかわり方につながる自己の発見・洞察他。